

仏像パート 1

多くの仏像を眺めてください。知っている仏像はどれほどですか。

仏像 はどうして生まれたのか 仏教の始めたブッダお釈迦様は

いつから仏像ができたのか お釈迦様は 80 歳にわたる生涯を過ごされた。

姓をゴータマ、名をシッダッタ ネパール南部のカピラ城の国王の長子として生れ、母を摩耶夫人といい、彼を産んで亡くなり、夫人の妹に養われた。

懐妊受胎に夢の中で白象の姿になった兜率天から降下して、夫人の右脇にはいったと言われています。出産は摩耶夫人の右脇から生れた。

奇瑞は誕生してすぐに七歩あるいて「天上天下唯我独尊」と右手を上げて宣言した。

その足痕に蓮華の花が咲いていたと伝えている。

これから以後の釈迦牟尼。父王が長子の将来を占いによる予言を試みた。

結果、比類の無い国王の転輪聖王となる。とでた。長子は育った閉ざされた空間から世間一般の姿を見たく、父王に許しを得て外出する。「四門出遊」と呼ばれる挿話。

従者シャノクを連れて、愛馬カンタカに騎乗して巡行した。

「受胎から誕生」から「修行」「覚者」への彫刻

マヤ夫人は快い眠りの中で、象の夢をみて受胎

お釈迦さまの誕生 国宝「誕生釈迦仏立像及び灌仏盤」

愛馬カンタカの出生 釈迦の出城 修行者 心身の疲労を乳粥（にゅうび）を獲り回復させる。

覚者としての活動開始

釈迦ゴータマの「仏陀の教え」布教が始まる。

80 歳まで、インド、ネパール各地に布教し、入滅涅槃に入った。

涅槃の彫刻

釈迦誕生はいつ ウィキペディアによると

紀元前 7 世紀、紀元前 6 世紀、紀元前 5 世紀など複数の説

仏像以前 釈迦の舍利を祀る 卒塔婆・五重塔 アショーカ王によってストーパー（仏塔）が建立

阿育王（紀元前 3 世紀にインドのマウリヤ朝王：アショーカ王を漢語）

サーンチー遺跡（釈迦の舍利を祀る 卒塔婆・五重塔と同意味）

エーラパトラ竜王の訪仏 三道宝階 初転法輪 三宝礼拝 三宝標(さんぼうひょう)」とは仏、法、僧の三宝

仏足石 日本には薬師寺にある仏足石 《仏足石碑》銘によれば、唐の王玄策が中天竺で転写した仏足石図を日本使人黄書本実が唐普光寺で再転写し請来し、天平勝宝 3 年（753）に文室真人智努が亡夫人のために刻ませた。

釈迦牟尼の姿は全く表現されないで、仏の姿だけは絶対に表されることはなかった。

仏は象徴でその形で表した。

仏陀はその超人的なものとして信仰の対象として表現されだした。

仏像が作られだしたのはヘレニズムの影響による。初期のガンダーラ系仏像 ギリシアの影響が大きい。

同時期に彫塑が開始されたマトゥラーの仏像。

先行するバラモン教や地主神に相通ずる意匠があり、現在にも続く仏像の意匠の発祥

正統的仏教諸派：富者が寺塔を建築し莫大な富を布施 小乗仏教

そうでない諸派：経典を読誦書写することのほうがはるかに功德が大きい。 大乘仏教

慈悲の精神に立脚し、生きとし生ける者すべてを苦から救う。自分が彼岸の世界に達する前に、先ず他人を救わねばならない。利他行を実践する人を菩薩と称した。だれでもそれを実践する人は菩薩と称した。

諸仏・諸菩薩に帰依し、その力によって救われ、その力に与って実践することを説く。

ブッダをますます超人的なものとして表象された。

特に信仰を受けたのが、阿闍仏・阿弥陀仏 弥勒仏・薬師如来に熱烈な信仰を受け、菩薩も超人化され観世音菩薩・文殊菩薩・普賢菩薩などは特に信仰された。

信仰が昂まるにつれて身体を具体的な形に表現された。

燃燈仏本生図 仏陀の前世の物語 過去仏

仏伝 禅定印仏坐像 ミホミュージアム

ヘレニズム文化の影響 ゼウス神像左足断片の発見 アフガニスタン北西部都市遺跡 アイ・ハヌムで発見

最初の仏像はギリシャ風 ガンダーラ美術

仏陀立像 弥勒菩薩交脚坐像 (釈迦の次にこの世に出現し、仏陀になると信じられた菩薩)

如來說法像 マトゥラ・カトラー出土 2世紀前半 ヘレニズムの影響を受けないインド独自

(釈迦の姿を禁止されていた時代の釈迦如来坐像のため「菩薩」と銘刻 仏像の源流を知る重要優品)

アショーカ王石柱の獅子柱頭 アショーカ王は「法」を人間世界に確立一つの法輪で「法」を表現

仏陀は釈迦族の獅子と称され仏陀が坐る座を獅子座と言われる

インド グプタ朝時代 マトゥラー出土 グプタ様式

初転法輪仏坐像 サールナート出土 グプタ朝様式はその後、東南アジア 中央アジア、東アジアに大きな影響を及ぼし、アジアの仏像のモデルとなった。ガンダーラ仏像にも大きな影響を与えた。

ガンダーラ 仏三尊像 三尊形式は日本にも反映 法隆寺釈迦三尊像

インドで生まれたブッダの仏教美術は 初めは釈迦像は作られなかったが、**約5世紀後に造られるようになる**インドのマトゥラや、パキスタンのインダス川上流にあるガンダーラに仏像が生まれる。

ガンダーラで生まれた仏像はギリシャ文化がアレキサンダー3世(大王)にもたらされヘレニズム文化として栄えた中に、仏像がその文化の影響を受けて造られる。

マトゥラに生まれた仏像は、グプタ朝時代に古来インド文化を継承する仏像として発展する。

それぞれ中国に伝わり、そして朝鮮半島へ日本へ伝わる。

中国に渡るとその国の様式に変化する。 **仏像の中国化**

雲高石窟 第18洞仏立像 5世紀の北魏像にはガンダーラ様式やグプタ朝様式が取り入れ、中国化していく。

グプタ様式とガンダーラ様式を取り入れ中国化

山東省青州 龍興寺 菩薩像(東魏～北齊 6世紀)

日本に仏教伝来 538年、552年 丁度この時代の中国の仏像は中国化している。

朝鮮 仏教伝来 高句麗372年、百済384年、新羅5世紀民間に伝来、527年仏教公認

遅れたのは、土俗のシャーマニズムの力が強かったためと思われる。

この時代の朝鮮は三国鼎立の時代 現在のところ、4、5世紀につくられたと思われる仏教美術の遺品はみられず 現存最古の在銘像は高句麗の延嘉7年(539)の金銅如来(によらい)立像(ソウル・国立中央博物館)。

中国東魏の造像様式の影響が濃厚

金銅如来三尊仏 三国時代 6世紀末 高さ 10 cm 中国から伝来した仏像は徐々に朝鮮化していく

半跏思惟像 韓国 三国時代 7世紀前半

広隆寺 宝冠弥勒半跏思惟像 7世紀

日本に仏教伝来 インド 中国 朝鮮 経由

飛鳥寺 鞍作鳥（止利仏師）作 飛鳥大仏

铸造年が絞れる仏像としては日本で最古級 609年完成

鞍作鳥は、飛鳥時代に活躍した仏師として有名、鞍作氏は鳥の祖父(司馬達等)の時に中国あるいは朝鮮半島から渡ってきた金属製品を作る渡来人の一族

法隆寺 釈迦三尊像 止利仏師代表作 623年

中国北魏の仏像の様式の影響を受けた、古式の衣文や服制、杏仁形の眼、古式の微笑（アルカイックスマイル）などに止利および止利式の仏像の特色がある。（ウィキペディア参照）

伊賀の見徳寺 木造薬師如来坐像（飛鳥時代白鳳仏）クスノキを材にした大半が一木造 面長の顔、細い目、小ぶりの鼻、上唇にキャシャな口が独特 右端の法隆寺六観音像（文殊菩薩像 白鳳時代・7世紀）に酷似 このようにして日本に仏像が伝搬された飛鳥・奈良・平安時代と仏教文化が栄え

やがて、日本独自の和様化に発展

薬師寺 薬師三尊像 白鳳時代の代表作

東大寺大仏（752）頭部は江戸時代

東大寺法華堂（三月堂） 不空羂索観音立像 脱活乾漆造の仏像 高さ 362 cm

興福寺 阿修羅像 脱活乾漆像 奈良時代

聖林寺十一面観音菩薩立像 奈良時代中期 国宝、木心乾漆像

観音寺 十一面観音立像 天平後期 木心乾漆像 京田辺市

藤井寺 千手観音坐像 脱活乾漆像 奈良 天平時代

唐招提寺 金堂内 仏像

左より千手観音立像 盧舎那仏坐像 薬師如来立像 奈良時代末 左から木心乾漆 乾漆 木心乾漆

左から奈良末～平安初期 奈良末 平安 796年以降

平安時代の仏像 神護寺 薬師如来立像 8世紀（782-806年頃） 「檀像薬師」像容は中国影響

後に密教美術として紹介 平安時代には密教仏像が急増

室生寺 金堂内 仏像 平安時代 釈迦如来像と十一面観音像が9世紀、他の3体が10世紀頃

三本松 子安地藏菩薩 平安時代

仏像の和様化 平安後期は和様化の時代 定朝様式 平等院鳳凰堂 阿弥陀如来坐像 1053年

寄木造 穏やか、優しい

仁和寺 薬師如来坐像 平安後期 院政期の円派 円勢・長円作 1103年

密教の伝来 日本で密教が公の場で初めて紹介されたのは、唐から帰国した伝教大師最澄（天台宗 比叡山・延暦寺 創始） 最澄に創始され、円仁、円珍、安然らによって完成（台密）

本格的に日本への伝来は、唐における密教の拠点であった青龍寺で密教を本格的に修学した空海（弘法大師）が806年に日本に帰国後。東寺、高野山 真言宗は（東密）

奈良 法華寺 十一面観音立像 国宝 法華寺は奈良時代だが十一面観音像は平安時代初

観心寺 河内長野 如意輪観音像 平安時代前期・9世紀の作

9世紀の密教仏像

京都神護寺の薬師如来像は貞観彫刻の初期の傑作である（9世紀初頭）

宝菩提院菩薩半跏坐像 京都向日 願徳寺 国宝

8世紀後半から9世紀の一木造 日本国内の工人組織も複雑化して唐の影響も加わり、高水準技能を持つ工人作

新薬師寺 薬師如来坐像 平安初期 国宝

渡岸寺 向源寺 十一面観音菩薩立像 国宝

東寺 立体曼荼羅 空海 21体仏像 平安 15体 839年

東寺 立体曼荼羅 明王ゾーン 空海 839年 不動明王坐像

長岳寺 阿弥陀如来坐像 三尊像 康慶作 1151年

平安時代末期 - 鎌倉時代初期の仏師。運慶の父 初めての玉眼 鎌倉期に繋がる作風が運慶に継がれ 仏師慶派としてつながる。

円成寺 大日如来坐像 運慶作 平安時代末期

台座内墨書 運慶承安永元年（1175）安元弐年（1176）奉渡大仏師康慶実弟子運慶（花押）

1173年長男の湛慶が誕生 運慶は20歳前後

六波羅蜜寺 地藏菩薩 運慶作 鎌倉時代

願成就院 運慶 鎌倉時代 武士の特徴化 本堂内 阿弥陀如来 不動明王 毘沙門天像

快慶作 運慶と同慶派 醍醐寺 弥勒菩薩

浄土寺 阿弥陀菩薩像 浄土寺 西方寺（山添村広瀬）阿弥陀菩薩像

ざっくりとまとめ

仏陀が誕生し入滅したあと仏像が造られなかった。後にガンダーラやマトゥラーで仏像が造られた。

その後 中国に伝搬し中国化仏像へ 朝鮮に伝搬し朝鮮化 日本に伝搬し 飛鳥仏 白鳳仏 天平仏 平安仏

この平安期に密教仏が伝わり 平安期の後期に、仏像が和様化した。

鎌倉期に慶派を中心に武士様式の仏像が、運慶中心に造られた。

仏像の手の組み方

仏像鑑賞のヒント 仏像の組織

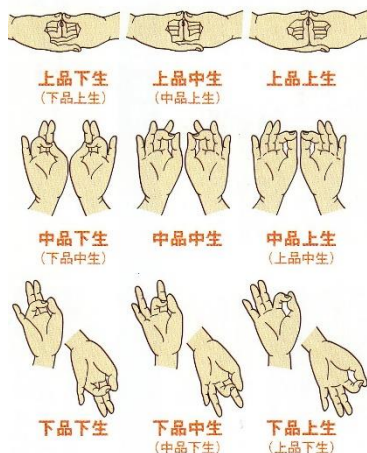
如来 菩薩 明王 天

如来 さとりを開いた者

釈迦如来 薬師如来 阿弥陀如来 大日如来

如来のからだ 32の特徴（三十二相）

阿弥陀如来の印 九品往生印



大日如来

東寺の両界曼荼羅 左 金剛界曼荼羅 右 胎藏界曼荼羅

東寺 金剛界 大日如来 高野山 胎藏界 大日如来

大日如来 印 禪定印 智拳印

菩薩 「菩提薩埵」 弥勒菩薩 観音菩薩 勢至菩薩 文殊菩薩 普賢菩薩 虚空蔵菩薩 地藏菩薩

弥勒菩薩 半跏思惟像 広隆寺と中宮寺

観音菩薩 千手観音菩薩 十一面観音菩薩 観音菩薩は三十三の姿に変化する 無限に姿を変えられる。

六道 天道 (てんどう) : 天人が住まう世界 三界 (上・中・下)

如意輪観音

人間道 (にんげんどう) : 人間の世界。四苦八苦に悩まされる「苦しみの相」・「不浄の相」・「無常の相」

真言宗 : 准胝観音 天台宗 : 不空羂索観音

修羅道 (しゅらどう) : 阿修羅が住み、終始戦い争いに苦しみと怒りが絶えない 十一面観音

畜生道 (ちくしょうどう) : 鳥・獣・虫など畜生の世界 苦しみを受けて死ぬ 馬頭観音

餓鬼道 (がきどう) : 腹が膨れた姿の鬼で餓鬼の世界 千手観音

地獄道 (じごくどう) : 罪を償わせるための世界 聖観音

六道世界より救われる信仰がある。

観音菩薩 元の姿は 聖観音菩薩 (しょうかんのん) 法隆寺の聖観音菩薩 宝冠に阿弥陀如来 左手に水瓶

薬師寺 聖観音菩薩 観心寺 如意輪観音菩薩 東大寺・法華堂 不空羂索漢音菩薩

法隆寺 六観音菩薩立像 六体伝わる 楠木材 飛鳥時代 7世紀

千本釈迦堂 大報恩寺 肥後定慶作 六観音

普賢菩薩 (大倉集古館蔵) 仏の悟り, 瞑想, 修行を象徴 象に乗る

文殊菩薩 安倍文殊院 仏の知恵を象徴する菩薩

釈迦如来の脇侍に使われる

地藏菩薩 釈尊が入滅後に弥勒菩薩が成仏するまでの 56 億 7 千年間無仏時代の衆生を救済することを

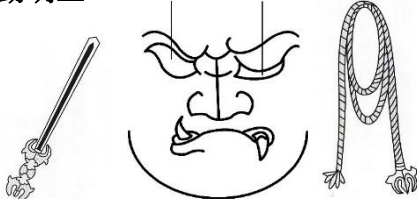
釈迦から委ねられたとされる。 子安地藏 藤田美術館の快慶作 地藏尊

明王 密教の仏たち 密教における最高仏尊大日如来の命を受け、如来の教えに従わない者に恐ろしい姿で

懲らしめ教化しようとする仏 第一の子分に不動明王 その子分に八大童子

不動明王

天に向ける 地に向ける



願成就院 運慶作 本尊 阿弥陀如来 右脇侍 不動明王 脇侍 制多伽童子 矜羯羅童子

左脇侍 毘沙門天像

(江戸後期の修理で、内部に願主は北条時政、作者は運慶と書いてあった)

五大明王 醍醐寺 霊峰館

徳明王像 西、軍荼利明王像 南、不動明王像 中央、降三世明王像 東、金剛夜叉明王像 北

東寺の講堂に空海建立の立体曼荼羅

愛染明王 愛して染まってしまふ心を悟りに変える 真っ赤 内山永久寺旧蔵、鎌倉時代、13世紀

孔雀明王 明王の中で唯一菩薩相 毒や病氣や災い、苦しみを消し去る。衆生を利益する徳

大元帥明王 最高の明王 秋篠寺・大元堂

天 インドのバラモン教やヒンズー教で信仰された神々を仏教に取り入れ護法神となったものの総称。

人々に現世利益をもたらす役目

梵天、帝釈天、吉祥天、弁才天、伎芸天、鬼子母神、大黒天、四天王、竜王、夜叉、聖天、金剛力士、韋駄天、天龍八部衆、十二神将、二十八部衆など

金剛力士 外敵を払い仏法を守護する神。 仁王像

東寺 梵天（ガチョウに乗る） 帝釈天（象に乗る）

吉祥天 薬師寺 仏教の守護神 四天王像 持国・増長・広目・多聞天

十二神将 薬師如来の大願に応じてある 室生寺 前列に十二神将像、新薬師寺 薬師如来の周囲に十二神将像

主な参照資料

『仏像が来た道』 杉山二郎 青土社 2010年6月

『シルクロードの仏たち』久能健 里文出版 1990年7付き

『ガンダーラ』平山郁夫シルクロード博物館 2009年7月

『仏像学入門』ほとけたちのルーツを探る 宮治昭 春秋社 2004年2月

『パキスタン・ガンダーラ彫刻展』東京国立博物館 2002年10月

『平山郁夫 悠久のシルクロード』龍谷大学 龍谷ミュージアム 2013年4月

中国石窟藝術『雲崗』鳳凰出版伝媒集団（南京市）2011年8月

『国立慶州博物館』2010年6月

『日本仏像史』水野敬三郎監修 株式会社美術出版社 2001年5月

『仏像学入門』ほとけたちのルーツを探る 宮治昭 春秋社 2004年2月

『やさしい仏像の見方』西村公朝 飛鳥園 1993年11月

『仏像の見分け方』西村公朝 飛鳥園 1997年9月

『図解・仏像の見分け方』発行者 石原大道 大法輪閣

『仏像のひみつ』山本勉 朝日出版社 2006年6月

『続・仏像のひみつ』山本勉 朝日出版社 2008年5月

『仏像の辞典』熊田由美子監修 成美堂 2012年10月

『日本の美術 21』飛鳥・白鳳彫刻 上原昭一 編 至文堂 1968年1月